様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　３ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００８１８

研究課題名（和文）L2学習者におけるハングル読み書きの習得過程とその個人差に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Acquisition Process of Hangul Reading and Writing and Individual Differences Among L2 Learners

研究代表者
宇都木　昭（Utsugi, Akira）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：６０５４８９９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　日本の韓国語学習者のハングル習得における個人差と文字の種類ごとの学習の難しさを明らかにすべく、オンラインテストによる調査を実施した。テストは音声を聞き4つの文字から正しいものを選ぶ形式で、7種類の異なる問題タイプで構成された。結果として、簡単な問題タイプでも正答率が低い学習者がわずかながらおり、一部の学習者がハングル習得に極めて困難を抱えている可能性が示唆された。また、特定の文字タイプ（特にw音を含む複合母音）で全般的に正答率が低くなる傾向がみられ、ハングルの特定の文字で透明性が低くなることが影響している可能性が示唆された。
　これに続く調査では、音韻規則がかかわる単語の綴りの習得も検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　日本の韓国語初学者にとって、韓国語学習はハングルという他の文字と全く異なる文字を学ぶところから始まる。これまで韓国語教育者の間では、ハングルは学びやすいと言われてきた。しかし、本研究が示唆するところでは、多くの学習者にとってハングルは確かに学びやすいものの、学習に著しい困難を伴う学習者が一部に存在することが示唆された。この困難さが何に起因するものかは、さらなる検討が必要である。
　また、ハングル習得にさほど困難を感じない学習者にとっても、すべての文字・綴りが一様に容易なわけではないこと、そしてこの文字・綴りごとの困難さの違いが文字・綴りの「透明性」によって説明されうることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：A survey using online tests was conducted to explore individual differences among Japanese learners of Korean in their ability to learn Hangul and the challenges they faced with different types of characters. The test included seven distinct question types where participants listened to audio and selected the correct character from four options. The findings revealed that a small group of learners consistently achieved low scores, even on easier questions, indicating significant difficulties in learning Hangul. Additionally, certain character types, particularly combinations of the semivowel /w/ with a vowel, consistently yielded lower correct response rates. This suggests that the limited transparency of some Hangul characters likely influenced these results. A subsequent study also investigated the acquisition of word spellings governed by phonological rules.

研究分野：韓国語教育

キーワード：韓国語　朝鮮語　ハングル　第二言語習得　読み書き　ディスレクシア　外国語教育　書記体系

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本の大学の朝鮮・韓国語教育においては、最初の段階で文字（ハングル）と発音を学ぶことが普通である。ハングルの学習は容易であるとしばしば言われるが、一方で Kanno（1991）は「ハングルは韓国人が強調するほどにさほど容易ではない」と述べている。研究代表者らの日本における韓国語教育の経験では、多くの学習者はハングルの基礎を問題なく習得するが、中にはハングルの習得に困難を伴う学習者がいる。また、文字や綴りによっても、習得が容易なものと困難なものとがあると考えられる。しかし、それらの実態は十分に捉えられておらず、困難さの原因も明らかにされていなかった。

L2 学習者における韓国語の文字と綴りの習得については、管見の限り、研究代表者らがかつて行った予備的研究（宇都木・神長 2018）以外に研究が存在しなかった。しかし、間接的に参考になる研究は、第一言語の読みの習得や発達性ディスレクシア（特に、発達性音韻性ディスレクシア）の分野に見出すことができる。これらの分野の研究における重要な知見の一つとして、読みの習得の困難さが言語の書記体系に依存するというものがある。例えば、Seymour et al. (2003) はヨーロッパの 13 の言語を対象として単語や非単語の読みの習得を調べ、言語圏によって習得の早さに違いがあることを明らかにした。また、発達性ディスレクシアの研究からは、言語圏によってディスレクシアの現れ方に違いがあることが知られている。例えば、Landerl et al. (1997) が英語圏とドイツ語圏のディスレクシア児を比較したところ、英語圏の子どもたちのほうがより重症であることが明らかなった。また、Wydell & Butterworth (1999) は、日英バイリンガルの人が英語ではディスレクシアの症状を示すが日本語では示さないという症例を報告している。このように言語圏によって違いが生じる理由の一つとして、発音と綴りの間の透明性（Wydell & Butterworth 1999）ないし 一貫性（Ziegler & Goswami 2005）に関する言語間の違いが指摘されている。例えば、ドイツ語は音素と綴りの対応関係が単純であるが、英語はより複雑である。もう一つの理由は、粒度に関する言語間の違いである。日本語は、モーラを単位とする仮名（平仮名、カタカナ）と、音節を単位とする漢字の混合によって表記する。これらの文字は、音素に分解することができないため、英語やドイツ語のように音素と対応する文字と比べて、粒度が粗い。Wydell & Butterworth (1999) の仮説では、粒度が粗い言語ほど発達性ディスレクシアが生じにくいという。

このような言語間の違いは、言語教育において重要である。なぜならば、母語と異なる書記体系を持つ言語を習う際には、母語の読み書きを習ったときとは異なる困難さを感じたり、母語の読み書きを習うときよりも困難さが高まったりする可能性があるからである。石井（2004）は、日本の英語教育において、日本語の綴りにおいて問題のなかった生徒であっても、英語を学習し始める段階で英語の綴りの習得に困難を示す学習者がいることを指摘している。また、春原他 (2004) は、英語学習に困難を訴える生徒に対し、日本語の仮名や漢字の学習到達度の検査を行い、到達度に遅れがあることを明らかにした。

以上をふまえると、日本語を母語とする韓国語学習者においても、日本語の読み書きとは異なる困難さを感じたり、日本語の読み書きにおいて感じていた困難さがより強く現れたりする可能性がある。なぜならば、韓国語学習において、学習者はこれまでとは全く異なる文字と書記体系を習うことになるからである。日本語の文字・書記体系（特に仮名）と比べたとき、ハングルには二つの特徴がある。第一に、ハングルは字母に分解できるという点がある。この点において、モーラ単位の文字である仮名と比べ、ハングルは粒度が細かい。第二に、ハングルは一つ一つの文字としては透明性が比較的高いが、複数の文字からなる語として表記されるときには、音韻規則の適用が表記に反映されないため、発音と綴りに乖離が生じ、透明性が低まる。しかし、このような点を考慮に入れた上でのハングル習得の研究は、管見の限りこれまでになされていない。

２．研究の目的

上述の背景をふまえつつ、ハングル習得に関する研究がほとんどなされていない現状のもと、本研究では以下の基礎的な課題（リサーチクエスチョン）を設定した。

課題 1：学習者のハングル習得の程度や習得過程にはどのような個人差があるか。

課題 2：文字の種類によって難しさに違いがあるか。学習者によって文字の難しさの傾向に違いがあるか。

課題 3：発音と綴りの透明性が高い語と低い語とで、学習者のハングル習得の困難さに違いがあるか。学習者によってその困難さの傾向には違いがあるか。

３．研究の方法

韓国語初級学習者を対象として、9 週間にわたって週 1 回のペースでオンラインテストを実施した。第一弾の調査では、各回のテストはそれぞれ 7 問の設問から成るものとした。第二弾の調査では、この 7 問に加えて新たに 4 問の設問を追加し、さらに 2 問の注意力を確認する設問を加えた。すなわち、第二弾調査の各回のテストは 13 問の設問から構成されるものとした。

いずれのテストも、各設問について再生される音声を聞き、呈示される 4 つの文字から該当す

るものを選択するという形式にした。

(1) 第一弾調査

この調査は、上述の課題 1 と課題 2 を明らかにするために実施した。各回のテストは 7 問から構成される。7 問はそれぞれ異なるタイプの問題になっている。なお、これらの問題タイプを以降は QT1-7 と呼ぶことにする。各問題タイプ（QT）の特徴をまとめると以下の通りである。

QT1：母音字母の交替
QT2：複合母音字母（w＋母音に限る）の交替
QT3：子音字母の交替
QT4：重音節中の母音字母の交替
QT5：子音字母の交替（架空の子音字母を含む）
QT6：複合母音字母（w＋母音に限る、架空の複合母音字母を含む）
QT7：ランダムな選択肢

例えば QT1 を例にとると、/a/ の音声を再生し、아、어を含む選択肢から解答を選択するようにした。

(2) 第二弾調査

この調査は、上述の課題 3 を明らかにするために実施した。ここでは、第一弾調査の 7 つの問題タイプに加え、以下の 4 つの問題タイプを追加した。

QT8：連音（高頻度語）
QT9：連音（低頻度語）
QT10：音節末阻害音の鼻音化（高頻度語）
QT11：音節末阻害音の鼻音化（低頻度語）

例えば QT8 を例にとると、/pʌbʷʌn/ という単語の音声を再生し、법원、법뭔などの選択肢から解答を選択するようにした。

これに加え、調査参加者が調査に集中しているかを確認するため、短い純音を複数回再生し、その回数を答えるという設問を 2 問設けた。

４．研究成果

第一弾調査の結果は、2023 年に論文として発表した（Utsugi et al. 2023）。主要な結果をまとめると以下の通りである。

まず、課題 1 のハングル習得の程度と習得過程の個人差については、特に習得の程度において個人差が明らかになった。具体的には、多くの参加者がこの調査において満点に近い高得点を示したのに対し、ごく一部の話者は低得点を示した。習得過程の傾向は特に見いだせなかった。

課題 2 の文字の種類による難しさの違いについては、QT2、QT4、QT6 において正答率が下がる傾向にあった。このうち QT2 と QT6 は w＋母音（wa、wʌ など）に関する設問であった。これらの設問で正答率が下がることは、文字の透明性の観点から説明できる。韓国語の w は音韻論的に単独の音素を成すにもかかわらず、文字においては複合母音字の前部要素として表され、その際の表記はㅗまたはㅜである。この二つのうちのどちらの字母で表記されるかは、複合母音字の後部要素（すなわち w の後続母音）によって決まる。つまり、音素と字母が一対一対応をしていないわけである。なお、QT4 において正答率が下がった原因は不明である。

興味深いことに、最も解答が容易と思われる QT7（ランダムな選択肢）においても、一部の参加者は低い正答率を示した。このような学習者については、発達性音韻性ディスレクシアの可能性が疑われる。ただし、この可能性を検討するためには、この傾向に該当する参加者に対して別の種類の調査を行う必要があるだろう。

第二弾調査については、現在分析中である。

＜引用文献＞

石井加代子. 2004. 「読み書きのみの学習困難（ディスレキシア）への対応策」『科学技術動向』2004 年 12 月号.

Kanno, Hiroomi (간노 히로오미). 1991.일본인을 위한 한국어 교재 개발과 교수 방법. 교육한글, 제 4 호.

Landerl, K., H. Wimmer & U. Frith. 1997. The impact of orthographic consistency on dyslexia: A German-English comparison. *Cognition*, 63(3).

Seymour, P. H., Aro, M., Erskine, J. M., & Collaboration with COST Action A8 Network. 2003. Foundation literacy acquisition in European orthographies. *British Journal of Psychology*, 94(2).

宇都木昭・神長伸幸. 2018. 「学習者のハングル書き取り能力はどう変化するのか？—音節書き取りテストの予備的分析—」第 78 回朝鮮語教育学会例会、早稲田大学.

Utsugi, A., M. Kim, & N. Jincho. 2023. Individual differences and character-based challenges in Hangul acquisition among Korean language learners in Japan. *Journal of Korean Language Education*, 34(2).

Wyldell, T.N. & B.L. Butterworth. 1999. A case study of an English-Japanese bilingual with monolingual dyslexia. *Cognition*, 70.

Ziegler, J. C., & Goswami, U. 2005. Reading acquisition, developmental dyslexia, and skilled reading across languages: a psycholinguistic grain size theory. *Psychological Bulletin*, 131(1), 3.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 金珉秀	４．巻 10
２．論文標題 日本人学習者による韓国語表記の誤りに関する一考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 韓国語教育研究	６．最初と最後の頁 89-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金珉秀	４．巻 24 (3)
２．論文標題 ハングル字形に対する日本人入門学習者の視覚的認識様相研究：子音字を中心に	５．発行年 2024年
３．雑誌名 学習者中心教科教育研究	６．最初と最後の頁 921-937
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Akira Utsugi, Minsoo Kim, Nobuyuki Jincho	４．巻 34 (2)
２．論文標題 Individual Differences and Character-Based Challenges in Hangul Acquisition Among Korean Language Learners in Japan	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Journal of Korean Language Education	６．最初と最後の頁 227-251
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18209/iakle.2023.34.2.227	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 宇都木昭・金珉秀・神長伸幸
２．発表標題 韓国語学習者はどのような文字を誤りやすいのか―日本の韓国語学習者を対象とした多肢選択テストの分析―（原題は韓国語）
３．学会等名 国際韓国語教育学会第32回国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 宇都木昭
２．発表標題 外国語の読み書きでつまずく学習者をめぐって ―ハングルの習得過程に関する研究から―
３．学会等名 愛知学院大学語学研究所第25回語学研究所講演会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 宇都木昭,金珉秀,神長伸幸
２．発表標題 日本語を母語とする朝鮮・韓国語学習者におけるハングル習得の傾向―多肢選択テストの分析―
３．学会等名 第7回韓日国際学術大会（日韓学術交流会）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 宇都木昭,金珉秀,神長伸幸
２．発表標題 学習者のハングル習得過程とその個人差―多肢選択テストの分析―
３．学会等名 朝鮮語教育学会第89回例会
４．発表年 2022年

１．発表者名 金珉秀
２．発表標題 ハングルの字形に関する日本人学習者の認識について－子音字母を中心に－
３．学会等名 日本韓国語教育学会 第14回 国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ハングル読み書き研究プロジェクト https://sites.google.com/hangulreading.page/web/home

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	キム　ミンス (Kim Minsoo) (20734833)	東海大学・国際教育センター・講師 (32644)	
研究分担者	神長　伸幸 (Jincho Nobuyuki) (90435652)	ミイダス株式会社（ＨＲサイエンス研究所）・HRサイエンス研究所・ゼネラルマネジャー (92676)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関